

# 洛中洛外図屏風歴博F本の位置づけについて

Research on the Meaning of the Folding Screens of Scenes In and Around Kyoto (Rekthaku F Version)  
OTSUKA Katsumi

大塚活美

## はじめに

室町時代末から江戸時代前半にかけての京都の町とその周辺を一双の屏風に描く洛中洛外図は、一〇〇点以上の作品が残存する。そのうち、描かれる景観が室町時代に遡る作品は、模本を入れても歴博甲本、東博模本、上杉本、歴博乙本の四作品しか残らない。残りの作品はすべて江戸時代のものといえ、その点からも江戸時代の作品を研究する必要性、重要性があるといえる。

研究史を振り返ると、洛中洛外図屏風を本格的に総合的に研究した美術史家の武田恒夫氏の研究がまず挙げられる。<sup>(1)</sup>氏は、京都を南北に分けて描く室町時代の作品を第一期の定型とし、京都を東西に分けて描く江戸時代の作品を第二期の定型として、全体を俯瞰した。以後の多くの研究は、この指摘を踏まえて第一期の定型・第二期の定型という言葉を使って作品の特徴を概括している。次に江戸時代の洛中洛外図の研究を

総合的に展開したのは、建築史家の内藤昌氏であった。<sup>(2)</sup>氏の研究は、描かれた地点を地図上の升目に置き換えることにより、洛中を中心に描く作品から洛外を中心に描く作品へと変化していくことを指摘した。次いで、縄文時代を専門とする考古学の片岡肇氏は、建物等を描く斜め線の筋勝手に注目し、作品を順勝手（右上から左下に向かう斜め線の勝手）と逆勝手（左上から右下に向かう斜め線の勝手）に分けた上で、同じ勝手の中から同種の粉本を使った作品を抽出して分析した。<sup>(3)</sup>次いで、近世史家の水本邦彦氏は、江戸時代の作品を主たる対象として、画面の方位と二条城前の行列とに注目し、政治史的な視点から洛中洛外図を分類した。<sup>(4)</sup>その後、中世・近世史家の黒田日出男氏を研究代表者とする「第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究」等と題する科学研究費補助金研究が二期八年間にわたり実施され、二冊の報告書が刊行された。<sup>(5)</sup>その中で、中世史家の大澤泉・加藤裕美子氏は作品に描かれたランドマークに注目し、第二定型の作品を三系統に分類し、その関係を図式化して提示

した。<sup>(6)</sup>さらに、大澤泉氏は二冊目の報告書の中で、ランドマーク・景観構成に注目して、第二定型洛中洛外図を八群に分類した。<sup>(7)</sup>江戸時代の洛中洛外図の全体を見渡す研究はこのような経過をたどりつつ進展している。これらとは別に、美術史家による個別の作品紹介・研究も行われていて、毎年新出作品が発見・紹介されるという状況が続いている。<sup>(8)</sup>

次に、洛中洛外図屏風歴博F本とその類似の作品の研究について見ておこう。歴博F本については、国立歴史民俗博物館での二〇〇七年の展覧会図録では、いわゆる「第二定型」の洛中洛外図とし、「法眼具慶筆」の落款は後筆かと解説する。同館での二〇一二年の展覧会図録では、歴博F本と同工房の洛中洛外図屏風は近年かなり見出されているとした上で、同一工房と見られる類品には月次風俗を入れたものもあるが、この作品には特に描かれていないと指摘する。歴博F本とその類似の作品については、先の大澤泉氏の研究ではF群として取り上げられている。F群には六作品が挙げられているが、そのうち四作品は同一粉本をもとに描かれている可能性があるとし、歴博F本も景観構成からはこの群に属するとする。F群の特徴としては、洛外のランドマークよりも洛中の描写が詳細であること、月次の行事が順序立てて描き込まれていること、島原の地が描かれていることを挙げるが、歴博F本は月次行事をそれほど描かないとする。中世・近世史家の小島道裕氏は、国立歴史民俗博物館所蔵の「職人風俗絵巻」と歴博F本とを比較し、町並みや人物の描き方、同一粉本からの図像などを挙げて、同じ工房の作品と見なせるとした。<sup>(9)</sup>近世史家の山口和夫氏は、後水尾天皇の二条城行幸行列を描いた洛中洛外図屏風に注目し、天皇の乗る鳳輦を担ぐ駕輿丁座人の装束が、上下白張か彩色かの相違が見られるとし、そこに作品の年代差が表れていると見た。<sup>(10)</sup>そして、歴博F本とその類似の作品については京都市の個人蔵本のみは白張か薄い黄色で描かれているとし、歴博F本と他の二作品は上下退紅で描かれるとして、そこに作品の年代差を指摘している。

以上の研究史を踏まえた上で、本稿では歴博F本に描かれた内容を紹介し、次いで歴博F本の類似の作品を紹介し、その群の中での歴博F本の特徴を指摘することを目的としたい。

### 江戸時代の洛中洛外図

歴博F本の考察に入る前に、江戸時代の洛中洛外図屏風の全体像を示しておく。前節でも書いたように、洛中洛外図は一〇〇点以上の作品が残存し、四点を除く他の九六パーセント以上の作品が江戸時代のものである。この作品群の全体像については、研究史のところで触れたように、いろいろな分析視覚が存在する。筆者は、片岡氏が取り上げた筋勝手、水本氏が注目した二条城前の行列の内容、大澤氏が分類に使った景観構成の三点を利用して、全体を俯瞰してみたい。

絵を描くときの斜め線の向きである筋勝手については、どの作品にも見ることができ、半双しか残らない作品、部分的にしか残らない作品でも、分析対象とすることができる。その上、斜め線の向きは、右上から左下に向かう順勝手か、左上から右下に向かう逆勝手のいずれかであり、難しい判断は必要としない。この点からも、すぐれた分類指標だといえる。この基準により一双眼屏風を分けると、次の五種類になる。第一は右隻・左隻ともに順勝手の作品、第二は右隻・左隻ともに逆勝手の作品、第三は右隻が順勝手で、左隻が逆勝手の作品、第四は右隻が逆勝手で、左隻が順勝手の作品、第五は順勝手と逆勝手が相半ばする作品である。この筋勝手による分類を類型と呼ぶことにし、第一類型（順・順類型）、第二類型（逆・逆類型）、第三類型（順・逆類型）、第四類型（逆・順類型）、第五類型（混合類型）と名付ける。管見によると、この基準による第一類型の作品は約三〇作品、第二類型の作品は約五五作品、第三類型の作品は約七作品、第四類型の作品は約五作品、第五類型の作品は約五作品である。

次に、江戸時代の作品の特徴の一つである二条城前の行列を見てみよ

う。行列の種類としては、將軍拝賀の参内、祇園会の神輿渡御、祭礼風流、徳川和子の入内、後水尾天皇の行幸などが見られる。参内と神輿渡御は慶長年間、入内は元和六年、行幸は寛永三年であり、行列の種類により作品の制作年の上限が決まることになる。<sup>13)</sup>江戸時代の洛中洛外図全体に対象を広げると、行幸以前の江戸時代前期前半の作品にはいろいろな行列が見られるが、行幸以後の江戸時代前期後半以降の作品の大半は行幸行列を描いている。例外的な行列としては、油小路通に朝鮮通信使行列を描くものが数点ある。二条城前の行列の内、神輿渡御と祭礼風流は西堀川通を中心に左隻のみに描くが、参内、入内、行幸の行列は西堀川通のみ描くものと、左右隻にまたがって内裏と二条城間を連続して描くものがある。行幸行列の描き方にも、内裏から二条城まで続くものは内裏に鳳輦、堀川通に牛車等を描くのに対し、西堀川通のみ行列を描くものは、堀川通に鳳輦等が見られる。

次に景観構成を見てみよう。江戸時代の作品では、京都の東側を右隻に、西側を左隻に描き分けるのが特徴である。その場合、右隻・左隻の両端をどこまで描くかはかなり異なっている。右隻では右端を稲荷社まで描くものが多く、さらに南側の伏見まで描くもの、北側の東福寺までしか描かないものがある。右隻の左端は、比叡山まで描くものが多いが、新しい作品には鞍馬寺まで描くものが一般的となる。左隻では、右端を鞍馬寺まで描くものが多かったが、鞍馬寺が右隻に描かれるようになる。と岩屋寺や金閣寺が右端となった。左端は、法輪寺までのもの、西芳寺までのもの、八幡まで描くものがある。鞍馬寺の所在する洛北地域の描き方の変化の背景には地理的な認識の進展があったと考えられる。つまり、室町時代の洛中洛外図は陰陽道的な方角観に則って東・南を右隻に、西・北を左隻に描いていたゆえに上賀茂、鞍馬地域は左隻に描かれ、その影響を受けて江戸時代前期の作品も洛北地域を左隻に描くことが多かったと考えられる。洛北地域が右隻に描かれるようになる理由として

は、そこが京都の東側と認知されるようになったからであると推測する。

景観構成に共通性・類似性をもつ作品が見られることも、江戸時代の洛中洛外図の特徴である。その理由には、発注を受けた工房が同じであり、筋勝手や景観構成を同じものとしたからだと推測できる。個々の社寺や祭礼なども、同一の粉本を用いたため、類似性をもったと推測できよう。そのような作品を集めると、幾つかのまとまりが見出せる。そのまとまりを片岡氏は類型と呼び、大澤氏は群または系統と呼んでいる。本稿では、筋勝手による分類を類型としたので、景観に類似性をもつ作品を系統と呼ぶことにする。現在までのところ、左隻の左端に淀付近の景観を描く林家本系統、本稿の対象とする歴博F本を含む住吉具慶本系統、歴博F本に類似する渡辺美術館本系統、右隻の右端に伏見城を描く堺市博物館本系統、類似作品が十数点ある佛教大学本系統、右隻が順勝手で左隻が逆勝手の田辺市立美術館本系統、右隻が逆勝手で左隻が順勝手の京都民芸館本系統などが見出せる。<sup>14)</sup>

以上のように、筋勝手、二条城前の行列、景観構成の三点から全体を俯瞰してみたが、江戸時代の洛中洛外図を見る指標はこの他にも幾つかある。詳しくは別稿を期したいが、その項目のみを列記する。第一に全体の構図である。景観構成とも関係するが、画面の下端をどのように描くかという点でみると、山や森を描くもの、町並みで切れるもの、金雲で切れるものなどがある。第二に象徴となる建物のランドマークをどのように描くかである。第三に描き方、線・色等の技法、人物・植物等の描き方である。描き方・作り方全体を合わせて作行ともいう。景観は異なるが、作行に類似性をもつものとして狩野派工房の作品、林原美術館本工房の作品などがある。第四に雲形で、箔・泥・砂子等の技法、形、数などである。第五に屏風の形状で、六曲一双などの形、大きさなどである。第六に伝来の経過である。第七に描かれている描写内容である。第八に画家である。これらの指標も併せることにより、江戸時代の洛中



洛外図を分類しうるといえる。<sup>(15)</sup>

## 歴博F本の概要

歴博F本について、その基礎データ及び描写内容を紹介する(写真一)。  
国立歴史民俗博物館の所蔵で、資料番号はH一六一九である。形状は六曲一双屏風、材質は紙本金地着色、寸法は各縦一二四・〇、横二八三・三センチメートルである。勝手は左隻・右隻ともに順勝手である。二条城前の行列は後水尾天皇の二条城行幸で、鳳輦が二条城の東大手門前にさしかかろうとする場面である。右隻の第一扇下端と左隻の第六扇下端に「法眼具慶筆」の落款と印影を有する。貼札の数は、紙跡も含めて右隻が四四箇所、左隻が三四箇所である(図一)。貼札には赤柘を付け、文字は平仮名が主で、漢字で書かれるところもある。金雲は、金箔の雲を主とし、一部に金砂子の雲が混じる。雲の形は横に連続する源氏雲で、四六列の雲が並ぶ。描かれる人数は、右隻が約六〇〇人(第一扇から約七〇人、約七〇人、約一二〇人、約一八〇人、約九〇人、約六〇人)、左隻が約七〇〇人(第一扇から約一四〇人、約一二〇人、約一四〇人、約一三〇人、約八〇人、約八〇人)である。

右隻は上部に山の峰を波型に、中央部に鴨川を直線状に描き、下端は金雲で覆う。第一扇は、上から順に、山及び稲荷・阿弥陀ヶ峰、金雲、東福寺・豊国社、金雲、三十三間堂、金雲、鴨川、金雲、町並み及び東本願寺、金雲。第二扇は、山、金雲、清水寺、金雲、大仏殿、金雲、鴨川及び五条橋、金雲、御影堂、金雲、町並み、金雲。第三扇は、山、金雲、八坂塔・祇園社、金雲、建仁寺、金雲、町並み及び祇園会、金雲、町並み及び祇園会、金雲、町並み、金雲。第四扇は、山、金雲、知恩院、金雲、鴨川及び芝居小屋、金雲、祇園御旅所及び四条通の祇園会、金雲、室町通の町並み、金雲。第五扇は、山及び銀閣寺等、金雲、黒谷・吉田社、金雲、鴨川及び三条大橋・下加茂、金雲、誓願寺及び町並み、金雲、町並み及び祇園会、金雲。第六扇は、山

写真1 歴博F本



及び比叡山・鞍馬寺、金雲、松が崎及び鞍馬畚降し、金雲、上賀茂、金雲、内裏、金雲、町並み、金雲である。

左隻は上部に山の峰を波型に、中央部に町並みを二列乃至は三列に直線状に描き、下端は金雲で覆う。第一扇は、山及び岩屋寺・梅尾、金雲、金閣寺・平野社、金雲、北野天神、金雲、所司代屋敷、金雲、町並み及び行列（騎馬）、金雲、町並み、金雲。第二扇は、山及び愛宕山、金雲、御室、金雲、北野経堂・妙心寺、金雲、二条城及び行列（牛車）、金雲、町並み、金雲。第三扇は、山、金雲、嵯峨釈迦堂及び嵯峨町並み、金雲、二条城天守、金雲、二条城及び行列（鳳輦）、金雲、町並み、金雲。第四扇は、山、金雲、天竜寺・大井川・法輪寺、金雲、町並み、金雲、町並み、金雲、町並み、金雲。第五扇は、山、金雲、神社、金雲、壬生寺及び島原、金雲、町並み、金雲、町並み、金雲、町並み、金雲。第六扇は、山及び山崎・八幡、金雲、西芳寺庭園、金雲、東寺、金雲、西本願寺、金雲、町並み、金雲、町並み、金雲である。

二条城は、左隻第二扇・第三扇の中央に、外堀・内堀の二重の濠、本丸の石垣及び隅櫓、五層の天守閣、本丸の橋、二の丸の石垣、隅櫓、土堀、東大手の高麗門、北側の櫓門、土橋、二の丸御殿などを描く。他の系統の作品などと比べると、内堀と本丸の隅櫓を描くこと、二の丸の土堀に石落しを描くこと、二の丸の南側に建つ唐門を瓦葺に描くことなどが目立った違いとしてあげられる。

内裏では、南側の堀を凹型に描き、窪まったところに南御門を描く。建立年の明らかな建物としては、寛永一四年（一六三七）の仁和寺五重塔、寛永一七年（一六四〇）の島原の設置、正保三年（一六四六）の祇園社石鳥居、明暦元年（一六五五）の本国寺五重塔などが見られる。

二条城前の行列は、先頭から隼人兵士、鳳輦、牛車二両、騎馬四騎の順である。隼人兵士は鳥兜を付け、矛を手に二列に並んで進行する。鳳輦は退紅色の衣を付けた駕輿丁により担がれる。

【左隻】



【右隻】

図1 歴博F本貼札

き か お	メ ム ミ マ ホ	ハ ノ	ニ ナ テ ト ツ	シ サ コ	オ ウ イ ア カ エ
く け	う い あ  え	フ ヒ  へ	ヌ   ネ	タ ソ セ ス  チ	キ  ク  ケ

お 「松か崎」 か 「ひゑ山ゑんりやく じ」 き 「くらま」 く 「上かも」 け 「内裏」	ホ 「なんせんじ」 マ 「やうくわん堂」 ミ 「くろたに」 ム 「銀角じ」 メ 「しやうくんちそう」へ モ 「よし田」 あ 紙跡(誓願寺) い 「三条はし」 う 「下かも」 え 紙跡(六角堂)	ノ 「宗林寺」 ハ 紙跡(知恩院) ヒ 紙跡(大和橋) フ 「きやう堂」 紙跡(祇園御旅)	ツ 「八坂とう」 テ 「れうせん」 ト 紙跡 ナ 「長らくじ」 ニ 「れやうあんじ」 ヌ 紙跡(建仁寺) ネ 紙跡(因幡堂)	コ 「おとわたき」 サ 「清水寺」 シ 紙跡(地主) ス 紙跡(大仏) セ 「五条八まん」 ソ 紙跡(五条橋) タ 紙跡(六波羅) チ 紙跡(御影堂)	ア 「いなり」 イ 「東ふくじ」 ウ 「歌中山」 エ 紙跡 オ 「あみたかみね」 カ 「とよくに」 キ 紙跡(三十三間堂) ク 紙跡 ケ 「東本願寺」
--	---	---	--	--	---

【左隻】

マ ホ ヘ	ネ	ナ ニ ト	チ タ	シ サ コ ケ	カ エ ウ ア オ
ム ミ	ハ ヒ ノ	ヌ	テ ツ	ソ セ ス	キ
メ	フ				ク

ヘ 「山崎」 ホ 紙跡(西芳寺) マ 紙跡(八幡) ミ 紙跡(東寺) ム 紙跡(西本願寺) メ 紙跡(本国寺)	ネ 「四条御たひ所」 ノ 「りんせんじ」 ハ 紙跡(島原) ヒ 「あまてら」 フ 「六角堂」	ト 「本こく寺」 ナ 「むめ宮」 ニ 紙跡(大井川) ヌ 紙跡(梅宮)	タ 「にそんゐん」 チ 「野々宮」 ツ 紙跡(二条城) テ 紙跡(神泉苑)	ケ 紙跡(愛宕) コ 「おむろ」 サ 「佐加之町」 シ 紙跡(釈迦堂) ス 紙跡(経堂) セ 「にし京」 ソ 「めうしんじ」	ア 「岩谷」 イ 「きたの」 ウ 「金角寺」 エ 「とかの尾」 オ 「ひらの」 カ 「たかを」 キ 「やうこうの松」 ク 紙跡(所司代)
--	--	--	--	--	---



年中行事の類はほとんど描かれないが、右隻第三扇から第五扇にかけての祇園会、第六扇の賀茂競馬などが見られる。

祇園会の山鉦は室町通、五条通（松原通）、寺町通、四条通にかけて一二基描かれる。先頭から長刀鉦、五条通に占出山、函谷鉦、寺町通に綾傘鉦、木賊山、蟠螂山、四条通に菊水鉦、天神山、山伏山、放下鉦、岩戸山、舟鉦の順である。山鉦の特徴としては、鉦の屋根の妻側に出し花飾りの見られることである。

落款と印影については、後補かともされるが、他のものとの比較がでないので不詳である。美術史家の判断を待ちたいが、本稿では具慶の作品またはそれに類するものとして考察することにする。なお、住吉具慶については、後述する。

### 歴博F本と同系統の作品

次に、歴博F本と同系統の作品を見てみよう。

個人本（京都国立博物館寄託<sup>16</sup>）は左隻のみ伝わる。第六扇の下端に「法眼具慶筆」の落款と印影がある。印影は歴博F本のものとは異なる。画面の縦寸法が五尺五寸あり、同系統の他の作品よりも幾分大きい。金箔と砂子による金雲は源氏雲が主であるが、上端に素槍霞状のものも見られる。鳳輦を担ぐ駕輿丁の衣装の色は白に近い。画面には七月から十二月の行事が描かれていて、中秋名月が第三扇に描かれるのが同系統の他の作品と異なる。貼札に「十一月火焼」などと月名と行事名が一緒に書かれている点も珍しい。第四扇に一人立ちの獅子舞が描かれるが、第五扇には太神楽の獅子舞の一回も描く。

個人本（芦屋市立美術館寄託<sup>17</sup>）は、この系統の標準的な作品で、画面の縦寸法は五尺で、金箔と砂子による金雲が五〜六列横に並び、その間に洛中の町並みや洛外の名所が描かれる。この作品には貼札はない。描かれる人数は右隻約七〇〇人、左隻約九〇〇人で、左隻の方が多い。

二条城本丸の隅櫓は三基見られる。右隻に一月から六月の行事、左隻に七月から十二月の行事が描き分けられる。右隻第二扇にある正月の門松は二組描かれる。祇園会の山鉦は二三基見られる。中秋の名月は左隻第一扇に描かれ、金閣寺の鏡湖池の船上から鑑賞している。一人立ち獅子は左隻第五扇の下部に描かれる。

愛知県の豊橋市二川宿本陣資料館本<sup>18</sup>は、東海道の三三番目の宿場二川宿の本陣を務めた馬場家に伝わった作品である。右隻の貼札の数が異常に多く、貼跡を含めると七四枚を数える。その理由には、祇園会の山鉦の名称や洛中の通り名を細かく書いてあることに求められ、発注者（鑑賞者）が京都の町に高い関心を有していたことが想像される。貼札の文字に漢字が多い点も注目できる。正月の門松は、右隻第二扇に一組だけ描かれる。祇園会の山鉦は他の作品より一基少ない二二基である。一人獅子は左隻第四扇の中ほどに左向きに描かれる。

大阪人権博物館本<sup>19</sup>は、銀雲の作品である点が最大の特徴である。画面全体の彩色は淡彩に近く、その点にも特徴がある。貼札は貼跡のみあり、現在は見られない。屏風全体に描かれる人数は、右隻約一〇〇〇人、左隻約一一〇〇人と、この系統の作品では多い方である。二条城の石垣の描き方などには独特のものがある。五月の節句幟が、第二扇と第六扇の二ヶ所に描かれるのも他にない特徴である。

前田・井伊子爵旧蔵本<sup>20</sup>は、売立目録の図版が知られるのみで、現在は所在不明である。やや不鮮明ではあるが、その図版を見る限り、現在知られている作品とは別のものと判断される。寸法や貼札の詳細については明らかでない。

福井県の越前市武生公会堂記念館本<sup>21</sup>も、この系統の一般的な作品といえる。貼札に「正月」から「十二月」までの月名をすべて入れている点は珍しく、行事を描いて表示することにこだわった作品といえる。五月節句の幟が四本立つこと、盆灯籠売りが描かれていない点など、細部に

他の作品と異なる点も見られる。鳳輦を担ぐ駕輿丁の衣装は退紅色として描かれている。

個人本（愛媛県美術館寄託<sup>(22)</sup>）も、この系統の一般的な作品といえる。貼札は少なく、文字は平仮名が主である。描かれる人数は、右隻約一〇〇人、左隻約一一〇人と、多い方である。行事では、正月の行事が右隻の第一扇に描かれ、正月の万歳、七月の盆灯籠売りの姿が見られないことなどが他と異なる。一人立ち獅子は右隻六扇の下部に見られる。

アメリカ合衆国のワシントンにあるフリーア美術館本は、右隻のみ残る作品である。正月の行事は右隻第一扇に描かれる。貼札の文字は平仮名が主である。描かれる人数は、右隻のみ約一〇〇人である。

京都府八幡市の正法寺本は、真野家に伝わってきたことから真野本とも呼ばれた作品である。画面の縦寸法は三尺五寸と、他のものより小さい。しかし、描く範囲、寺社名所等の配置は、他の作品と大きくは変わらない。描かれている人数は少なく、右隻約六〇〇人、左隻約八〇〇人である。年中行事もほぼ同じように描かれるが、祇園会の山鉦は一二基で、盆灯籠売りも見られない。鳳輦を担ぐ駕輿丁の衣装は退紅色である。

学習院大学の学芸員資格取得事務室資料である洛中洛外図掛軸<sup>(25)</sup>は、この系統の右隻第六扇を軸装にしたものである。上から、比叡山と鞍馬寺、吉田社と松が崎、下鴨と上賀茂、内裏、町並みが、五枚の紙を貼り継いで描かれている。描かれる人数は六七人で、他の作品と大差はない。行事は五月節句で、幟、菖蒲葺き、飾り兜、印地打ち、賀茂競馬などが見られる。

以上の作品を比較するために一覧表化した（表一）。この表だけでは作品の前後関係や相関関係は判然としないが、二条城天守閣や中秋名月、太神楽の描き方などから、個人本（京都国立博物館寄託）には他にない要素が多くみられ、この作品が先行して描かれたと言える。正月行事を右隻第一扇に描くものと第二扇に描くもの、鳳輦を担ぐ駕輿丁の衣の色の違いなどから、幾つかの小群に分けることができる。個人本（芦屋市

表 1 住吉具慶本系統洛中洛外図屏風作品比較

	個人(京博)	個人(芦屋)	二川宿本	人権博本	前田・井伊家本	武生本	個人(愛媛)	フリーア本	歴博F本	正法寺本	学習院本
形態	6曲1隻(左)	6曲1双	6曲1双	6曲1双	6曲1双	6曲1双	6曲1双	6曲1隻(右)	6曲1双	6曲1双	1幅(右第6扇)
材質・彩色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色・銀	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色
高さ	5.5尺(166.6)	5尺	5尺(151)	5尺(149)	(不明)	5尺(155.7)	5尺(155)	5尺(150.5)	4尺(124)	3.5尺(109.5)	5尺(146)
雲	種類 源氏雲・素槍	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲
技法	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子	銀箔	(不明)	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子
貼札	枚数 左48、右-	無し	左36、右74	痕有り	有り	左40、右52	左7、右15	左-、右20	左34、右44	左37、右48	左-、右7
文字	平仮名・漢字	-	漢字が主	-	(不明)	平仮名・漢字	平仮名が主	平仮名が主	平仮名・漢字	平仮名・漢字	平仮名・漢字
人数	右隻 左隻	約700人 約900人	約700人 約700人	約1000人 約1100人	(不明)	約900人 約1100人	約1000人 約1100人	約1000人 -	約600人 約700人	約800人 -	67人 -
勝手	右隻 左隻	- 順	順	順	順	順	順	順	順	順	順
右隻	右端 左端	- 鞍馬	稲荷 鞍馬	稲荷 鞍馬	稲荷 鞍馬	稲荷 鞍馬	稲荷 鞍馬	稲荷 鞍馬	稲荷 鞍馬	稲荷 鞍馬	- 鞍馬
左隻	右端 左端	岩屋 八幡	岩屋 八幡	岩屋 八幡	岩屋 八幡	岩屋 八幡	岩屋 八幡	- 八幡	岩屋 八幡	岩屋 八幡	- 八幡
二条城	位置	左隻2-3扇	左隻2-3扇	左隻2-3扇	左隻2-3扇	左隻2-3扇	左隻2-3扇	-	左隻2-3扇	左隻2-3扇	-
天守閣破風	下から1.2.1	下から1.2.1	下から1.2.1	下から1.2.1	下から1.2.1	下から1.2.1	下から1.2.1	-	下から1.2.1	下から1.2.1	-
本丸隅槽	有り(2基)	有り(3基)	有り(3基)	有り(3基)	有り(3基)	有り(3基)	有り(3基)	-	有り(2基)	有り(2基)	-
内裏	南門	-	有り(四)	有り(四)	有り(四)	有り(四)	有り(四)	有り(四)	有り(四)	有り(四)	有り(四)
南西の樹木	-	無し	無し	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り
堀川通行列	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	-	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	-
駕輿丁の衣裳	白	白	白	白	退紅	退紅	退紅	-	退紅	退紅	-
祇園会	神輿	-	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	無し	-
山鉦	-	23基	22基	23基	23基	23基	23基	23基	12基	12基	-
年中行事	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	無し	無し	有り	有り
正月	-	右2扇	右2扇	右2扇	右2扇	右2扇	右1扇	右1扇	無し	右2扇	-
門松の数	-	2組	1組	2組	1組	2組	2組	1組	無し	2組	-
盆灯籠売り	有り	有り	有り	有り	無し	無し	無し	-	無し	無し	-
中秋名月	左3扇	左1扇	左1扇	無し	左1扇	左1扇	左1扇	-	無し	左1扇	-
一人立ち獅子	左4扇中(右向)	左5扇下(右向)	左4扇中(左向)	左5扇下(右向)	(不明)	左5扇下(左向)	右6扇下(右向)	-	左4扇中(左向)	左4扇中(左向)	-



立美術博物館寄託）と豊橋市二川宿本陣資料館本は比較的に近く、個人本（愛媛県美術館寄託）とフリーア美術館本は比較的に近い関係にある。一扇分のみ残る学習院大学の資料は、下部の町家の瓦屋根の有無、内裏の南西の樹木の有無、比叡山の山腹の描き方などを比較すると、個人本（芦屋市立美術博物館寄託）・豊橋市二川宿本陣資料館本よりも個人本（愛媛県美術館寄託）・フリーア美術館本に近い傾向が見られる。ただし、樹木等の描き方は各本によりかなり相違も見られ、粉本を共有する同一の工房であっても、一定の時間と異なる職人により描かれたと推測される。

### 歴博F本の特徴

歴博F本を同系統の作品と比較すると、大きさが縦四尺本であること、年中行事がほとんど描かれないこと、住吉具慶の款記の見られることなどが特徴として指摘できる。

洛中洛外図屏風の大きさは、画面が縦五尺であるのが通例である。天と地の表具部分と合わせると約六尺になり、本間屏風といわれる大きさになる。まれに五尺五寸の大きな作品も見られるが、それは例外的なものである。その点で、個人本（京都国立博物館寄託）は、大きさからしても特別な作品といえることができる。一方、歴博F本は四尺本で、三尺五寸の正法寺本とともに小さな作品といえる。画面は小さくても描き込まれる社寺名所等の数、貼札の数はそう変わらないが、人数が少なめになっている。また、祇園会の山鉦の数が同系統の本間屏風の二三基に対して一二基と、約半数である。

歴博F本と同系統の作品の最大の特徴は、年中行事が細かに描かれていることにある。洛中洛外図は、室町時代の作品には四季絵・月次絵の伝統が見られたが、江戸時代前期の作品にはその伝統が薄れ、歳時よりも時勢が前面に出た作品が多くなった。それに比して、この系統の作品は、歳時が事細かに描かれる。これは、江戸時代前期後半から中期前半

にかけて京都の歳時が復活したということだけでなく、この系統の作者なり工房が歳時を描くことに熱心であったためだと考える。同時期の作品と推測される佛教大学本系統の作品には、行事は頻出しな。室町時代の作品は、四季絵・月次絵の順番を右隻の第六扇から春・正月を始め、第一扇に夏・六月を終え、左隻の第六扇から第一扇へと季節は移行したが、歴博F本と同系統の作品では右隻の第一扇から春・正月を始めていて、この点をもつてしても伝統とはいえず、当時の月次図の描き方に基づくものだといえる。正月の門松と注連縄についても、上杉本洛中洛外図のそれとは異なり、貞享五年（一六八八）刊行の『日本歳時記』の図に近い。<sup>(26)</sup>五月節句の幟、飾兜、菖蒲葺きも『日本歳時記』などに見られる図に近似する。この系統の作品に特徴的な一人立ちの獅子は、頭部に獅子頭を被り、腹部に太鼓を括り付けて打ちながら舞う獅子舞で、二人により獅子頭と胴部が分担され、別の人が演奏する太鼓や笛に合わせて舞う太神楽系の獅子舞とは異なる芸態である。一人立ちの獅子舞は現在では東日本を中心として見られ、京都周辺の太神楽系の獅子舞とは異なる分布域を示していて、一人立ちの獅子舞を描く作品が江戸に出てきてから描かれた可能性を示唆する絵柄といえる。<sup>(27)</sup>この系統の歳時の図柄と類似のものには、一七世紀後半以降の作とされる月次風俗図屏風（たばこと塩の博物館所蔵）<sup>(28)</sup>などがあり、時代や粉本などの関連性が注目できる。それに比して、歴博F本は祇園会の山鉦巡行、賀茂競馬、二条城行幸以外には歳時を描いていない。その理由は今のところ不明であるが、歴博F本の大きな特徴として挙げることができる。<sup>(29)</sup>

次に歴博F本に款記の見られる住吉具慶のことについて考察する。住吉具慶（広澄）は、住吉派を開いた住吉如慶の子で、寛永八年（一六三二）生まれ、宝永二年（一七〇五）四月三日に没している。<sup>(30)</sup>住吉如慶は土佐光吉、土佐光則にやまと絵を学び、寛文二年（一六六二）に住吉家を起こした。具慶は住吉派二代を継ぎ、天和三年（一六八三）に江戸表に召し出さ

れ、貞享二年（一六八五）に將軍家御用絵師となった。元禄四年（一六九二）一月に法眼位に叙せられている。このことから、「法眼具慶筆」の落款と印影をもつ個人本（京都国立博物館寄託）は、元禄四年二月以降のものといえる。<sup>31</sup> 住吉派のやまと絵に関しては、伝統を保持しながらも、新しい構成や図様を模索したことが指摘されている。<sup>32</sup> この点に関係する可能性のあるものとして、鳳輦を担ぐ駕輿丁の装束の色の問題がある。既述のように、歴博F本と同系統の作品では、薄い黄色ないし白色で描いた白張のものと、退紅で描いたものがあった。記録によると寛永行幸は白張で行われていたが、古代の鳳輦を担ぐ駕輿丁の装束は退紅であり、そのような古典の研究の成果として退紅で描く作品が作られた可能性が高いと推測される。

歴博F本の特徴の考察として、次に貼札を見る。歴博F本の貼札の特徴は、赤色の輪郭を有することである。貼札の紙質、装飾等については、全作品において詳細図版を確保できていないため不明なところもあるが、この系統では越前市武生公会堂記念館本も輪郭を巻くように見受けられる。歴博F本の貼札は、原位置から移動しているもの、剥がれ跡のみ残るものも多い。また、他の作品にはあまり見られない地名、例えば「歌中山」（右隻第一扇）、「あみたかみね」（右隻第一扇）、「五条八まん」（右隻第二扇）、「しやうくんちそう」（右隻第五扇）、「にしの京」（左隻第二扇）、「佐加之町」（左隻第二扇）、「あまてら」（左隻第五扇）などもある。「歌中山」は渋谷越にあった清閑寺付近のことで、実際には阿弥陀ヶ峰と清水寺の間に位置するが、屏風では阿弥陀ヶ峰の南東の山に貼られている。「しやうくんちそう」は北白川の瓜生山にある勝軍地藏堂であるが、歴博F本では松皮葺の建物として描く。同じ位置の建物にフリーア本では「小はら」、越前市武生公会堂記念館本では「白川」の貼札を付す。「あまてら」（尼寺）は源実朝の妻本覚尼が創建した遍照心院大通寺で、実際には東寺の北西に位置したが、歴博F本では島原の位置に貼札を付している。歴博F本で臨川寺とする建物（左隻第五扇）を豊橋市二川宿本陣資料館

本では「しゆしやく権現」（朱雀権現）とし、西芳寺にあたるところ（左隻第六扇）に同資料館本では「みつ薬師」と「尼寺」の二つの貼札を付して、この系統の作品では貼札の地名は位置の比定などに厳密さを欠くといえる。勝軍地藏や朱雀権現、水薬師などは、京都の人でもあまり知らないところである。これらの寺社は、承応三年（一六五四）の「新板平安城東西南北町并洛外之図」に「せうくんちそう」「しゆしやくこんけん」、宝永六年（一七〇九）の「新板増補京絵図」に「水薬師」などとして載り、位置の比定には地図が利用された可能性が推測される。

## おわりに

本稿では、江戸時代の洛中洛外図の研究史を踏まえた上で、歴博F本に描かれた内容を紹介し、歴博F本と同系統の作品を紹介し、その中で歴博F本の特徴をいくつかあげてみた。最後にそれをもう一度整理しておく。

江戸時代の洛中洛外図を見る指標にはいくつかあるが、建物・街路等の斜め線である筋勝手により類型分けができること、二条城前の行列により年代推定の手掛かりがあること、景観構成により系統分けが可能であることなどを見て、それらを総合して類型と系統という分類で作品群を整理してみた。

歴博F本の基礎データ及び描写内容を細かく示し、次いで歴博F本と同系統の一〇作品を探し出し、作品ごとの概要と特徴を紹介した。系統としての特徴は、左右隻ともに順勝手であること、二条城前の行列は後水尾天皇の二条城行幸で、鳳輦が二条城前に描かれていること、景観・構図としては右隻の左端は鞍馬寺、左隻の左端は八幡であること、一月から十二月までの年中行事が描かれていること、住吉具慶の落款をもつ作品があることである。作品相互の関係は個人本（京都国立博物館寄託）が先行して描かれ、他は幾つかの小群に分けることができるようである。

その上で、歴博F本の特徴として、歴博F本の大きさが縦四尺本と他

のものより少し小さいこと、この系統の作品としては珍しく年中行事をほとんど描かないこと、後筆かともされる住吉具慶の款記が見られることを挙げた。「法眼具慶」という落款からは、具慶が法眼位になった元禄四年十二月以降の作品であることが指摘でき、この系統の作品の制作年代を推測する上で大事な手掛かりであることを述べた。貼札や描写からは、歴博F本を含むこの系統の作品には版本地図の影響もあるのではないかと提示した。

以上のことを通して、江戸時代前期に盛んに描かれた洛中洛外図屏風が江戸時代中期に年中行事の研究、版本等による京都情報を生かして、作品として再生された可能性のあることを指摘しておく。その詳細についてはいずれ別稿を記したい。

# 注

- (1) 京都国立博物館編『洛中洛外図』(武田恒夫氏執筆、角川書店、一九六六年)。
- (2) 内藤昌「近世洛中洛外図屏風の景観類型」『国華』第九五九号、一九七三年。
- (3) 片岡肇「洛中洛外図屏風の類型について」(一)『京都文化博物館研究紀要 朱雀』第九集、一九九七年。
- (4) 水本邦彦「洛中洛外図の中の京都」『新しい歴史学のために』第二二九号、京都民科歴史部会、一九九八年。後に、水本邦彦「絵図と景観の近世」所収、校倉書房、二〇〇二年。水本氏は『日本の歴史 第十巻 徳川の家デザイン』(小学館、二〇〇八年)でも、同様の見方を記している。
- (5) 『第二型洛中洛外図屏風の総合的研究』(科学研究費研究成果報告書、二〇〇五年)。「中近世風俗画の高精細デジタル画像化と絵画史料学的研究」(科学研究費研究成果報告書、二〇一〇年)。
- (6) 大澤泉・加藤裕美子「第二型本諸本の分類における基礎的考察」ランドマークの比較を中心に」『第二型洛中洛外図屏風の総合的研究』(二〇〇五年)。
- (7) 大澤泉「景観構成に見る第二型本の分類——洛中洛外図ランドマーク対照表補論——」『中近世風俗画の高精細デジタル画像化と絵画史料学的研究』(二〇一〇年)。
- (8) 例えば、次のような作品である。二〇〇四年に兵庫県尼崎市で聚楽第行幸を描いた洛中洛外図屏風が発見された(伏谷優子「聚楽第と聚楽第行幸が描かれた洛中洛外図について——尼崎本洛中洛外図の概要と構図の検討——」(笠井昌昭編『文化史学』の挑

- 戦」、思文閣出版、二〇〇五年)。二〇〇六年には岐阜市歴史博物館の所蔵になった洛中洛外図屏風が展示された(『博物館だより』六四、岐阜市歴史博物館、二〇〇六年)。二〇〇七年には、徳川和子の入内を左右隻にわたって描いた新発見の洛中洛外図屏風が紹介された(狩野博幸「大江戸カルチャーブックス 新発見洛中洛外図屏風」、青幻舎、二〇〇七年)。二〇一〇年には、伏見城の描かれた洛中洛外図屏風が新たに発見され、展示された(『変革のとき 桃山』、名古屋博物館、二〇一〇年)。
- (9) 国立歴史民俗博物館編『西のみやこ 東のみやこ——描かれた中・近世都市』(二〇〇七年)。
- (10) 国立歴史民俗博物館・国文学研究資料館編『都市を描く——京都と江戸——』(人間文化研究機構、二〇一二年)。
- (11) 小島道裕「職人風俗絵巻」と「洛中洛外図屏風歴博F本」『歴博』第一六四号、国立歴史民俗博物館、二〇一一年)。
- (12) 山口和夫「江戸時代「洛中洛外図屏風」の景観・制作年代についての一考察——行幸行列・鳳輦・駕輿丁装束を中心に——」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第四三三号、二〇〇八年)。
- (13) 大塚活美「江戸時代の洛中洛外図の主題と構図について」(『歴史評論』第六二二号、二〇〇二年)。
- (14) 系統の呼び方は、代表的な作品の所蔵先の名称等を冠して呼ぶことにした。片岡氏が註(3)の研究で紹介した司馬家本については、ここでは同作品の現所蔵者の田辺市立美術館を冠する名称としている。
- (15) この点については、既稿でも簡単に触れている(大塚活美「林原美術館本洛中洛外図屏風と同一工房の作品について」、『中近世風俗画の高精細デジタル画像化と絵画史料学的研究』(二〇一〇年)。
- (16) 京都国立博物館編『洛中洛外図 都の形象——洛中洛外の世界』(淡交社、一九九六年)。
- (17) 二〇一〇年七月の芦屋市立美術館の「巷・ちまた・のコレクション」展に展示。そのチラシに図版が載る。
- (18) 『大名の宿本陣展(豊橋市二川宿本陣資料館、一九九四年)』。
- (19) 『季刊・リパティ』第一九号(大阪人権博物館、一九九七年)。
- (20) 『日本屏風絵集成 別巻(講談社、一九八一年)』。『前田子爵井伊子爵家御蔵器入札』(東京美術倶楽部、一九九一年)。
- (21) 『京の息吹き』(越前市武生公会堂記念館、二〇〇八年)。山口和夫「寛永三年二条城行幸行列が描かれた「洛中洛外図屏風」——越前市武生公会堂記念館本について——」(『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第三六号、二〇〇七年)。
- (22) 二〇〇八年秋に愛媛県美術館で展示。
- (23) 『日本屏風絵集成 二巻(講談社、一九七八年)』。
- (24) 『古美術』八八号(三彩社、一九八八年)。
- (25) 『ミュージアム・レター』一七(学習院大学史料館、二〇一二年)。



- (26) 『江戸時代の門松』(名古屋市博物館、一九九四年)。
- (27) 笹原亮二「三匹獅子舞」(『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館、一九九九年)。一人立ちの獅子舞の絵は、元禄三年(一六九〇)の刊記をもつ『人倫訓蒙図彙』に見られ、それとの関係も注目される。
- (28) 『近世初期風俗画 躍動と快楽』(たばこと塩の博物館、二〇〇八年)に載る。類似的図柄の作品として、個人蔵(愛媛県美術館寄託)「十二月月図屏風」がある。二〇〇八年秋に愛媛県美術館で展示された。
- (29) 具体的な事例はわからないが、行事の憚られる出来事などが起ったのかもしれない。
- (30) 『江戸のやまと絵―住吉如慶・具慶―』(サントリー美術館、一九八五年)。
- (31) 住吉具慶で注目されることには、住吉派五代の広行(一七五五―一八一二)の編纂になる『倭錦(本朝画事)』に「具慶、洛中洛外図屏風、巻物数有」と記されていること、また東京藝術大学の住吉派の粉本に「都鄙図」の下画があり、そのうちの一つに明治四年(一八七二)に板橋貫雄が「元禄年中法眼具慶依綱吉將軍之好画洛中洛外之景色(略)」と記すことである。これらから、具慶が洛中洛外の屏風や巻物を描いたこと、五代將軍綱吉の求めにより洛中洛外の絵を描いたことがいえる(榊原悟「住吉具慶筆『都鄙図』解題」(『古美術』八八号、一九八八年)註四。黒川真頼の『考古画譜』(『黒川真頼全集 第二』、一九一〇年)にも「倭錦云、具慶、洛中洛外図屏風、巻物数有」と引用される)。
- (32) 住吉派の研究としては、土居次義「如慶と具慶」(『江戸のやまと絵』、サントリー美術館、一九八五年)。下原美保「住吉如慶・具慶によるやまと絵制作について」(『鹿児島大学研究紀要 人文・社会科学編』第六〇巻、二〇〇九年)などがある。

補注

査統終了後、歴博F本と同系統の作品一点が紹介された。高さ一一〇センチの六曲一双屏風で、年中行事も描かれている(個人蔵。板倉聖哲監修、大倉集古館編『描かれた都―開封・杭州・京都・江戸』、東京大学出版会、二〇一三年)。

(京都府立総合資料館、国立歴史民俗博物館共同研究協力者)  
(二〇一二年一〇月二六日受付、二〇一三年一月二五日審査終了)